

## 世界に羽ばたけ！ 米山学友⑤

# ボリビア人の歯を救え！

年を重ねるにつれて不具合が発生する“歯”。日本では、80歳になっても自分の歯を20本以上残そうという「8020運動」<sup>ハチマルニイマル</sup>が提唱され、最近では後期高齢者の23%が達成していると報告されています（平成17年度歯科疾患実態調査）。

一方、南米で最も開発が遅れている国ボリビアでは、国民にとって歯科医療は遠い存在です。特に農村部では健康保険制度が未整備のため、生命に直結しない歯科診療には生涯かかる機会のない人がほとんどです。ある村では、12歳の児童が平均8.3本の虫歯を抱えており、治療した歯はわずか0.3本という調査結果もあり、ボリビアの口腔衛生の現状には課題が山積しています。

日本での留学を終え帰国した米山学友、ウガルテ・カボ・ファン・ルイスさんは、ボリビアでは数少ない口腔衛生の専門家として、国民の歯を守るべく、日々奮闘しています。

### 医学の道を断念して歯学へ

もともとは医学部を志望していたウガルテさん。しかし、兵役を解除された時期が医学部の受験に間に合わず、仕方なく選んだ道が歯学部でした。ところが、大学で学ぶうちに、口腔の健康状態が寿命にも影響を及ぼすこと、他国と比較してボリビア人には虫歯・歯周病などの問題が多いことがわかり、治療技術だけではなく、国の保健衛生システムから見直す必要があると考えました。

1996年、国際協力機構（JICA）のボランティア活動でボリビアに滞在していた日本人女性と結婚。これが転機となりました。妻の母国である日本をもっとよく知りたいと、ボリビア在住の多くの日本人や日系人たちと友達になり、日本の話を聞いたり、運動会に参加するなど、交流を深めました。

やがて子どもが生まれ、妻の里帰りに連れ添って来日



母国ボリビアで歯科医療のボランティアを行うウガルテさん

した際、日本の歯科医療レベルの高さに驚き、留学を決意したのです。

### 歯の治療よりもまず予防を

妻の故郷、長崎での新しい生活が始まりました。日本で最も離島が多い長崎県は、へき地・離島医療システムの整備が進んでおり、広い国土に約900万の人口が点在するボリビアにとっての、格好の医療モデルにもなりました。

2002年、長崎大学大学院博士課程に進学したウガルテさんは、教育や健診制度などの社会的見地から疾病予防・健康増進を考える公衆衛生学を専攻しました。

「ボリビアに歯医者がいないわけではありません。ただ、設備の整った診療所も、そこに通える人も限られているし、何よりも口腔衛生への意識の低さ、歯みがきなどによる予防の習慣がないことが問題だと思いました」

また、ボリビアでは高齢者の口腔衛生の実態がわかっていなかったため、現地で約300人から聞き取り調査を行い、どんな要因が高齢者の口腔機能に影響するのかをデータから検証することにも成功しました。

### 日本語の壁を乗り越えて

米山奨学生になったのは博士課程3年生のとき。歯科開業医であるカウンセラーの計らいで、地元の歯科医院を見学し、治療器具や患者の受診システムなどの現場を見ることができました。ただ一つ困ったのは、世話ク



よねやまだより

口は食べ物を味わい、消化する最初の器官です。口の機能が低下して食事や会話に支障をきたすと、認知症が進んだり、免疫力の低下にもつながるともいわれます。南米の開発途上国ボリビアでは、若い世代の90%近くに虫歯があり、ほとんどの人が治療を受けていないとの報告もあります。米山学友のウガルテさんは、母国ボリビア人の虫歯を防ぎ、口腔衛生への認識を浸透させるべく、草の根の活動を続けています。

ラブの長崎出島ロータリークラブから頼まれた毎月のミニ卓話。真面目な性格のウガルテさんは、日本語が不得意だったこともあり、人前で話すことが大の苦手でした。悩むウガルテさんを会員は温かく励まし、カウンセラーが話し方や内容をアドバイスするうちに、最後には出張卓話をこなすほど上達しました。

来日当初も日本語は大きな壁でした。周囲に溶け込まず、孤独なウガルテさんの心をなぐさめたのは音楽でした。「コンドルは飛んでゆく」などで知られる南米の民族音楽、フォルクローレ。母国でCDを出すほどの腕前をもっていたウガルテさんは、長崎を拠点に活動するグループの一員に迎えられ、次第に明るさを取り戻しました。米山奨学生になってからも、クラブや地区の行事で楽器を奏でると、心の壁が消えてゆくように感じました。音楽で広がった絆きずなを示すかのように、帰国するときには、多くの人々が彼との別れを惜しみました。

## ボリビアで口腔衛生の知識を広めたい

帰国後、日本で学んだ知識を伝えたいと、NGOで歯科医師をしながら、大学教育に携わるためのカリキュラムを受講。2008年4月からは国立エル・アルト大学で教鞭をとり、口腔衛生分野の後進を育てています。これまでに調査・研究の結果をまとめた2冊の本も出版しました。

「国民の口腔衛生状態を改善するためには現状を知る

## プロフィール

ウガルテ・カボ・ファン・ルイス さん

(2004 -06年 / 長崎出島RC)  
1968年生まれ。ボリビアの最高学府、国立サン・アンドレス大学で歯科学専攻。99年来日、長崎大学大学院博士課程修了。現在、国立エル・アルト大学で教鞭をとる傍ら、治療や予防教育のボランティアも行っている。



必要があります。この本が、ボリビアの保健省や歯科医療関係者に役立てばうれしい」

週末には車を何時間も飛ばして歯科医のいない地域を訪れ、学生を連れてボランティアで治療をしたり、歯の大切さを説いて回っています。ウガルテさんは言います。

「ロータリアンのように、自分も人のことを考え、行動できる人間になりたい。ただそれだけです」

ロータリー米山記念奨学会事務局

米山記念奨学事業に関するお問い合わせ・ご意見、または「よねやまだより」についてのご意見は、(財)ロータリー米山記念奨学会まで、ぜひお寄せください。

TEL: 03-3434-8681 FAX: 03-3578-8281

Eメール: mail@rotary-yoneyama.or.jp

## 後に続いてほしい —— ロータリアンから1億円の寄付 ——

昨年12月半ば、名古屋名東ロータリークラブの坂本精志氏から1億円の寄付をいただきました。経営するホシザキ電機株式会社(本社・愛知県豊明市)の上場のため、保有していた自社株式を放出し、その譲渡益の一部を関心を寄せるいくつかの団体に寄付されたのです。坂本氏は米山カウンセラーを2度務められたほか、博士課程に進学した学友を援助するなど、外国人留学生の支援に熱心に尽力してきました。創業者で、ロータリアンであった父の故・薫俊氏が、出身地の島根で進学困難な学生を支援していたことや、自身も勉学にいそしむ外国人留学生とかかわったことで、米山記念奨学事業への関心を深めたと言います。「米山は経費も最小限に抑えているし、多くのボランティアに支えられている。資金を投機に回さず、地道に使っていることも好ましい」と坂本氏。「本来は匿名で寄付したい」と、今回も含めこれまでの表彰品はすべて辞退されましたが、「後に続く人が出てほしい」と、記事として紹介することを了解いただきました。